

がんばれ東北!

東北の土人形特別展



お福さん



わらべ三番叟

さがら

相良人形

はなまき

花巻人形

日本土人形資料館

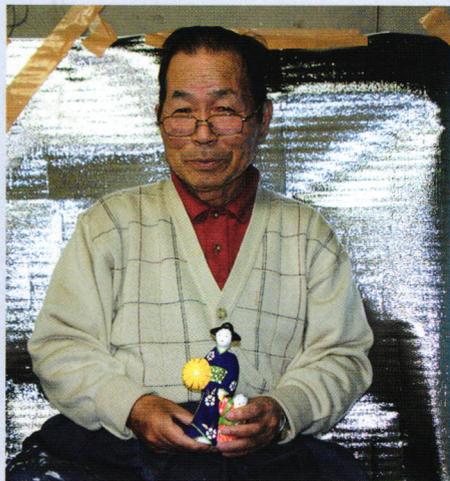
長野県中野市大字中野1150 TEL/FAX.0269-26-0730

開館時間：9時～17時（12月～2月は10時～16時）

休館日：毎週木曜日、年末年始（12月29日～1月3日）

観覧料：一般200円（団体150円）高校生100円（団体70円）※団体は20人以上

相良人形



制作者：七代目 相良 隆さん

土人形制作のきっかけ

昭和42年に祖先の人形を眺め考え、相良人形を復興しようと勤めていた建設会社を退職しました。

制作の現況

平成23年に大病を思い入院。退院後、調子が良いときのみ顔書きの作業をしている。

制作では、息子の隆馬が型抜きと素焼き、胡粉塗り後、息子と妻が彩色をしています。

色は、赤、黄、緑3色を基本にアクリル絵の具と紅花を使用し、黒は墨を使っています。



今後の展望と方向性

これからも相良人形の伝統を守り続けていきたい。

相良人形の窯元ご案内

- 相良 隆 (さがら たかし)
- 住所 / 〒992-0023 山形県米沢市下花沢3-3-64
 - 電話・FAX / 0238-23-8382
 - 定休日 / 無休
 - 営業時間 / 9:00~17:00
 - 駐車場 / 5台
 - 交通 / 公共交通機関：JR奥羽本線 山形新幹線 米沢駅より徒歩12分
東北自動車道：福島飯坂ICより60分

花巻人形

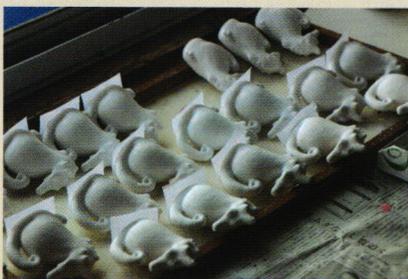


制作者：三代目 平賀 恵美子さん

土人形制作のきっかけ

昭和49年、平賀孫左衛門と平賀章一の父子が花巻人形を復元した当時、民芸品の鹿おどりや木のべこを作り生計を立てていましたが、新しい民芸品を作りたいと花巻人形の制作を始めました。

最初は、包装などの手伝いをしていましたが、平成8年に孫左衛門が他界したのをきっかけに、夫の章一から人形づくりを教わりました。



制作の現況

干支のほかに、小ぶりな人形を主流に制作しています。色は、赤、黄、緑、青、黒、白の6色を使い、鮮やかな色彩に仕上げます。

今後の展望と方向性

これからも、干支を中心に作り続けていきたい。新しい型にも挑戦したい。

花巻人形の窯元ご案内

- 平賀 恵美子 (ひらが えみこ)
- 住所 / 〒025-0084 岩手県花巻市桜町3-68-23
 - 電話 / 0198-23-5658
 - 定休日 / 不定休
 - 営業時間 / 9:00~17:00
 - 駐車場 / 6台
 - 交通 / 公共交通機関：JR東日本 東北本線 花巻駅より徒歩30分
東北自動車道：花巻南IC出口より10分

今回は、東日本大震災(2011年3月11日)の哀悼と被災地の復興を願い、東北三大土人形に数えられる山形県の相良人形と岩手県の花巻人形を取り上げます。

相良人形

歴史

相良人形は、江戸時代に米沢藩主の上杉公が領内財政立て直しのため、藩士の相良清佐衛門厚忠を陶器製造の技法習得のため福島県の相馬に赴かせ、安永7年(1778)成島に陶窯を築き日常雑器を焼かせたことから、その特技を活かし、京都伏見人形の型を学び、埴人形にも影響を受けながら独特の人形型で土人形を創始して、自らの姓を入れ相良人形と呼んだものです。

なかでも江戸期のものは古相良と呼ばれ、素朴さの中にも気品があると評されていました。眼と眉を入れるのは代々当主の仕事で、勤めのほか、畑仕事をし、冬期間は専ら人形の制作をしていました。

初代清佐衛門厚忠が人形作りを始め、二代目作右衛門直厚、三代目清左衛門厚正は江戸、京都、越後の諸地方をめぐり、陶器を勉強してさらに古風な作風に磨きをかけ、四代目清左衛門は優れた作品を維持し、五代目清一、六代目チエ(清一の娘)は第2次世界大戦中の昭和18年まで人形制作を続けました。

その後、昭和42年(1967)に七代目隆が人形作りを再興しました。



ほてい 大黒腕相撲



おしくら



ほてい



お多福



相良人形内裏雛



作品と特徴

独特の三角目と細やかな表情に加え、東北地方の土人形の中でも特に小振りで、高さ4寸(約13cm)に満たない可憐な人形が多いこと。ユーモラスな物語風テーマも多く、心がなごむ可愛らしい印象を与えます。

また、彩色には紅花を使用し、胡粉の独特の光沢、黄緑色の色彩が目を引きまします。

型

型は300体近くあり、うち100体は祖先の型を守り続け、修理して使っています。

制作の傾向

近くの畑で粘土を採取し、土人形作りに適している粘土にするのが最も難しい工程。型抜き(2枚型)をして、約800度で焼き上げ、胡粉塗り後に顔を描き、彩色します。年間を通して制作しています。

最近、ほのぼのとした作風の「おしくら」や「お福さん」が人気です。



恵比寿大黒



前帯女郎



静御前

参考文献

畑野栄三著 全国郷土玩具ガイド1
塩野徳五郎、舩健之助、桃井喜三郎、奥村寛純 共編
相良家と相良人形

花巻人形

歴史 花巻人形は、18世紀の初め、花巻市鍛冶町の太田善四郎が、京都の伏見人形、仙台の堤人形の制作技法を伝習して作りはじめたのが起源といわれています。

天保年間(1830年頃)が全盛で、太田、古館、^{なしろざわ}苗代澤、^{うわの}上野、照井などの店で、多くの職人を使い、3月と5月の節句に飾る人形を大量に制作し、方々に売り歩き広めました。

人形の題材は多種多様で、内裏雛を中心に信仰、縁起物、歴史上の人物、舞踊物、説話や昔話物、風俗物、動物など広範囲にわたっています。明治時代には、文明開化のハイカラや日清、日露戦争の世相を反映したもので作られ、その数は千種類とも二千種類とも言われています。

そして、昭和30年代になると制作者の照井トシを最後に一度制作が途絶えました。

しかし、昭和49年に民芸品を作っていた平賀工芸社の平賀孫左衛門と平賀章一父子が花巻市の依頼で約100種類の型を復元。息子の章一は昔と変わらない型と彩色を再現したいと、古い花巻人形を見るなど研究を続け、いくら注文があっても量産せず、一つ一つ丁寧に仕上げることをモットーに人形づくりをしていました。

平成8年に孫左衛門が他界し、3年後の平成11年には章一が亡くなり、現在は、章一の妻恵美子が人形作りを受け継いでいます。



平敦盛



熊谷次郎直実



内裏雛

作品と特徴

花巻人形の大きな特徴は、赤色の衣装に梅や桜、牡丹などの花柄を描き華やかさを演出しています。また、背面は白いままで、彩色せず底に紙を貼ります。

型

型の数は100点余。その他に創作土人形も30点余あります。

制作の傾向

干支を中心に年間を通して制作しています。型抜きは、粘土を柔らかくして型に流し込み、干支は1日、大きい型は1~2日おいて型から外します。約800度で焼き上げ、胡粉塗り後に彩色して、最後に顔を描きます。



娘三番叟



子守り



熊乗り金太



泥棒猫



泥棒猫

参考文献

畑野栄三著 全国郷土玩具ガイド1
熊谷章一、吉田義昭 編
図録/岩手の民俗・民芸双書②花巻人形